

第 2 回市史講座ミニレポート：平成 30 年 5 月 19 日（土）

「松江藩主松平宗衍・治郷二代の寵愛を受けた江戸詰藩士・萩野信敏-天愚孔平伝-」

西島太郎先生（松江歴史館学芸係主幹）



今回の講座では、江戸で干社札を始めたと言われる奇行の人物「天愚孔平」として名を知られた萩野信敏（はぎの・のぶとし）について、松江藩士としてはどのような人物であったかを編年順にお話いただきました。

萩野信敏は、松江藩主六代松平宗衍、七代松平治郷、晩年の 10 年は八代斉恒に側近くで 70 年余り仕え、博識な儒者として多くの著書を残しています。江戸の著名な人物関係の書物にも名を挙げられながら、生年については近年の研究によりようやく確定されたことから分かるように、謎の多い人物です。

史料的に確認できる萩野家は、元祖玄玖（げんきゅう）が三代藩主綱近の代に藩医として仕え、二代春庵（しゅんあん）が侍医として五代藩主宣維宗衍の政治向きの補佐や学問の指南を務めていました。

3 代萩野信敏（天愚孔平）は、享保 18 年（1733）に江戸麹町に生まれました。12 歳の時に宗衍の御伽役を勤め、寛延元年（1748）、16 歳で江戸藩邸の儒者宇佐美しん水に学んでいます。宝暦 10 年（1760）、28 歳で家督（300 石）を継ぎ、翌年、父の勤功や側勤めの

ため格式組外となり、明和 4 年（1767）に治郷が 7 代藩主となってからも引き続き藩主家族の側近くで勤めています。

父の学究を受け継ぎ多数の著書を著しましたが、安永 5 年（1776）、44 歳の時に宇佐美しん水が死去、翌年、宗衍が剃髪し、この頃から信敏の奇行が始まると推定されます。以後も著作や碑文執筆等続け、文化 13 年（1816）、84 歳になりようやく隠居が認められました。翌文化 14 年（1817）、江戸で死去。実際は 85 歳だったと思われますが自らは 110 歳とも記したと伝わり、墓碑銘には 101 歳と記されているそうです。

萩野信敏の著作や業績として、以下のような事項を紹介されました（講座資料 1 参照）。

- 宝暦 12 年（1762）父・春庵編、信敏増訂『東藻会彙』（詩文用語集）刊行
- 明和 3 年（1766）宇佐美しん水編著『徂徠先生素問評』跋文（あとがき）執筆
- 明和 8 年（1771）『張仲景論集解叢』（張仲景の医学書の注釈書）刊行
- 安永 6 年（1777）「村上君行状」（国元の藩士・村上舎喜の伝記）執筆
- 安永 7 年（1778）宗衍からその寿像碑文の撰文を命じられる。また、退筆塚裏面の撰文を命じられる。
- 安永 8 年（1779）『塙勾当伝』（塙保己一の伝記）執筆『学書捷徑』（手習いの入門書）刊行、『沢参捷徑』（御種人参の効能や使用法）執筆
- 安永 9 年（1780）『出雲天隆公碑記』刊行
- 天明 7 年（1787）この頃、『荒河營説』（荒川・隅田川の治水策）、『推政施政』（治政の大要）執筆
- 寛政元年（1789）『泰西輿地図説』（世界地理書）序文執筆
- 寛政 4 年（1792）『負陽献芹婆心録』（江戸屋敷勤番の合理化）執筆
- 寛政 6 年（1794）関孝和の墓碑文執筆
- 享和 2 年（1802）広瀬周伯著『三才窺管』（蘭学書）序文執筆

そのほか、萩野信敏について書かれた以下の史料を紹介されました（講座資料 2 参照）。

（１）八島五岳著『百家奇行伝』、弘化 3 年（1846）刊

江戸時代の伝記逸話集。風体は奇異だが博識で文章に優れている。千社札始める。

（２）大槻如電著『少年読本第五十篇大槻磐水』、明治 35 年（1902）刊

狂態奇行の人であるが剛毅にして学識あり。

（３）市島春城著『芸苑一夕話』下、大正 11 年（1922）刊

書道の大家であった。

（４）大槻玄沢著『蘭学階梯』、天明 8 年（1788）刊

序文を萩野信敏が執筆